

図書館学の楽しみ方

宍道 勉

A. 図書館学とは何か

1. library science と librarianship

現在我々が何気なく図書館学の名で呼んでいるのは英国で使われている Librarianship と米国で一般的に利用する Library Science と2つの呼び名から派生したものであるとされている。用語の歴史としては古い前者が、librarian が示すとおり図書館員の行動と図書館との関わりを重点に置くと考えられていたのに対し、コンピュータが図書館に採り入れられたのと時を同じくするように、アメリカを中心に現在の科学認識からは後者が優勢であり一般的である。

2. 失われつつある図書館学

－ 1 情報科学に庇を貸して暖簾を奪われた

ところが図書館のコンピュータ化が進むのと時を同じくして図書館学の中では情報科学が同席あるいは同居するようになった。つまり library science が library and information science と称されるようになった。

それまでは「情報」は図書館が扱うものであり、図書館に付属するのが情報である、という関係で捉えられていた。図書館がハードウェア（主）で情報はソフトウェア（従）であったはずである。ところが今や主客転倒で、なんだか図書館学も情報の方に気を使うあまり「従」であるソフトウェアが重要視されるようになっている。

そしていつの間にか「図書館・情報学」のように一まとめに括られて語られるようになった。現在のこの世界（教育機関でも研究者集団においても）の関係や集団が妙に納得させられるのである。はっきり申せば「情報科学」が幅を利かせ図書館学の方が肩身が狭いように見えてならない。

－ 2 図書館学が消滅した韓国

それを目の当たりにしたのが韓国である。

1999年夏、西日本図書館学会の一人として韓国図書館学会との交流と言うことでソウルを訪れた。そこでお会いした韓国の研究者の名刺で見て驚いたのは大学所属学部あるいは学科名称が情報学、あるいは情報科学であり情報学教授、助教授なのである。つまり彼らの学会は「韓国情報学会」である。ところが案内された先は韓国国立国会図書館であり、ソウル大学図書館、梨花女子大などいずれも「図書館」の名称を持つ建物であった。

懇親会で何よりもまず質問したのは学会名称への「疑問」「不思議」「不可解」であった。何故図書館があるのに「図書館学」がないのか？と。答えは「以前は確かに「図書館学」であったが、「図書館」は建物にすぎない、それはあたかも「ホテル」と同じで研究の対象とならない」であった。返す言葉がなかった。

韓国には「図書館」はあっても図書館学はないのである。関係ないかも知れないが、彼らのほとんどが我が国の「図書館情報大学」に留学していたことであった。

それはそれで良いじゃないか、という人もあるだろうが私には彼らの論理が納得できなかった。

3. 日本図書館学の現状

－1 司書科目と「図書館学」

a. 図書館学は実学か科学か

日本十進分類法（第8版）における「図書館学」の扱いでは

→010 図書館 Libraries

であったものが、第9版になると、

010 図書館、図書館学 Libraries, Library and Information science

へと変わる。図書館学が加わったことになる。

ご存じの通り図書館学（あるいは「図書館」）という学問は類目の「総記」中にあり「类目」図書館で010となりさらに「要目」において細分化されている。さらに細目に進むと「研究・指導法、図書館学教育、職員の養成」となりその下に「司書課程、講習、研修」が続く。

これで見る限り、図書館の仕事はまったく「技術」でありそれ以外には見えない。

つまり学問分類の「日本十進分類法」では図書館学とは「実学」ですと明言している。どこを探しても他の学問のように「思想・哲学」が基礎理論として存在しないのである。せいぜい、

010. 1に図書館論、図書館と自由（これが「思想・哲学」なのかなあ？）とあり、図書館の理念はここに納める、とある。

これだけでは「図書館学」が「科学」には見えない。

－2 図書館学は司書科目と同一である

そこでさらに分類細目を見ていくと「図書館政策・行財政」に始まり「図書館管理」から「資料の収集・整理・保管」とくれば、もうこれは「正しく」「司書課程」に設けられている「講義科目」の羅列そのものである。

では試しに図書館に行って「総記」に配架されている図書館学関係資料を見よう。一番初めに目に付くのは図書館学「講座」とか「シリーズ」のように「図書館学」の付いた十数巻が連なる幅の広い固まりである。そして司書科目の規定が変わると（その都度見事に）途端に新しい「講義科目」が登場しそのまま教科書も書名に変更があったりする。ところがその内容は「司書科目」と一字一句変わらぬそのものであるとわかる。それを誰も不思議に思わない、と言う世界が図書館学なのである。

－3 図書館学会と雑誌論文

図書館学論文、その特徴の一つがビブリオメトリックスなる図書館情報学の引用分析である。量をこなすのが目的の他の分野の学者が生産した「研究」論文を、図書館研究者（図書館学者）は中身の評価でなく「論文の紙の重さ」で計ってそれに理屈を付けている。それにどんな意味があるのですか？「都合の良い」データだけを取りだして（その多くがインターネットやデータベ

ースのデジタル・データであったりする)それをパソコンでちょこっと弄んで「図表」や得体の知れぬ「グラフ」を作り、いかにも理論めいてそれらしく仕立てているにすぎないのに。コンピュータ依存型、データ信奉型論文である。何の意味もない論文には腹が立つ。

また結構多いのが海外文献の紹介である(私もやっているのだが)またこれが全て(ほとんど)アメリカの文献紹介ときている。

次に多いのが、コンピュータ導入報告。医学論文で言えば「症例報告」に過ぎないがそれを論文としている。それも自分のが最も優れている、といった自慢文献。いわば事例報告の類である。

特に学校図書館関係では、相変わらず「読書指導」の報告が多い。最近ではコンピュータとインターネットを導入したモデル「授業研究」例が目白押し。それを学校長が推薦し、また真面目に真似をしようとする。日本の教育は他人を真似ることばかりをやっている。

b. 学問(科学)としての認知

-1 日本では図書館学が知られていない

一般にその存在を知られていない、図書館は知っていても学問があるとは思っていない、耳慣れない、なじみが薄い、仲間内の学問の感が強い。

第一に自覚のない学問である。図書館学を「司書科目」として勉強してきた人が多い。実に多くの人々が「図書館学」を学んできたし、現在も全国の大学や短大の司書課程で多くの学生が学んでいる。さらに司書教諭の学校図書館学も含めると相当数である。

ところがその後司書になった人も、資格を取って終わった人(司書に就いていない人)は特に「図書館学」を勉強したという自覚はないだろう。そのくらい図書館研究は学問と意識しないでいる人が多い。

それに対して、法律学、経済学、勿論医学など大学でそれぞれ学部や大学院で学んだ人たちは、自分はその学問を学んだという意識があるに違いない。だから図書館学だってその大学や、学部、学科を卒業した人たちは「図書館学」を学んだ、研究したという意識も自覚もあるだろう。この違いは何であろうか。

これも日本の図書館学の現状である。

-2 サービス学

図書館学の研究対象は「図書館」と利用者「サービス」に向けられる。すなわち人に対する「サービス」を研究するという点でホテル学、旅行学或いは秘書学と同じであるとされる。科学や学問に関心のある方はそういう見方をしている。サービス学は3流の学問であると。別に「サービス学」であってひねくれるわけでもないが、そう言われるのはちょっと歯痒いのである。

このことから図書館学は図書館に関わりのない一般の人々にとって入り込む余地のない学問であると同時に、サービス学であるからこそ図書館学の存在が一般には無関心となるのも仕方がない。

-3 専門職の科学

職業としての図書館「司書」に必要な専門的知識と技術を研究するいわゆる専門職のため

の学問とする考え方がある。この点において他の専門職である医師や看護婦が研究する学問、つまり医学や看護学と同じ領域にあるとされる。

しかし決定的に異なるのは、司書だけが「国家試験」によって保証された資格でないという点である。学んだことが資格として確立されていないのが、いかにも立場が弱い、権威がない。

－4 司書という資格

1) 司書資格のこともかんがえたい

「ななつのこ」問題というのがある。

私は司書科目の講義前に、時々自分の読んだ本を紹介する。それは必ずしも「科目」に関係するものではなく、むしろそのほとんどが小説のたぐいである。灰谷健次郎や荒俣宏、そして村山由佳など雑多で、特にミステリィがたびたび含まれる。例えばジェフ・アボットの図書館シリーズ（ミステリアスプレス文庫）など。それらは図書館の方にご無理を言って、私の「推薦図書コーナー」に置いて貰っている。時々デート・スリップを見て貸し出しの状況を探っていると、講義の際には対して関心なさそうな様子を見せているが、それでも案外最近は読まれる度合いが増えてきた。今のところ5、60冊程度置いているが「あれ全部読みましたよ」と言う学生が現れるようになった。僅か数名ですが、一方学生からも私への推薦図書を紹介させている、私の好きな立場の逆転である。これまでも高村薫や篠田節子、浅田次郎からその他絵本などを勧めてくれた。森博嗣の密室ミステリィもあった。それに対しては口頭や電子メールで必ず簡単な読後感を伝えている（読書情報のコミュニケーションと称している）。

その中で紹介してくれたのが加納朋子「ななつのこ」（創元推理文庫、1999）で特に気になったのが下の部分である。

これは「先生（図書館学教員＝筆者注）には申し訳ないのだが、はっきり言って図書館学なんて退屈以外の何者でもない。……別に司書課程取得コースをわざわざ受講する必要は本当はなかった。けれども履修登録の時、ちらりと姑息、かつ実際の考えが頭をよぎったのだ。つまり、取れる資格ならば取っておいた方が、就職の際に若干有利に働くのではないか、と。」

「かくして諦めの良い私は、就職の際に提出する履歴書にたった一行『司書資格あり』と記入する為だけに、図書館学の授業に精勤しているのである。『免許・資格』の欄が空白であるよりはいくらかマシだろう、という程度の実に消極的な理由である。」

これをどのように読むべきか？図書館学の実体を表しているように思えてならない。

2) 司書教諭講習会

平成15年から発効する「学校図書館法」により本格的に司書教諭が置かれることは図書館にとって大なる前進である。そこで例によって数少ない「司書教諭」を養成するための講習会が毎年の夏全国の都道府県全てで開かれている。

そこに関わりを持ってから良く分かったことは本を読まない教師が実に多いという事実である。司書教諭の資格に「読書できること」が必修要件であって貰いたい。講習会終了と同

時に「司書教諭資格」取得では余りにも味気ない、情けなくなる。

B. 新しい図書館学へ

1. 図書館学を楽しくする方法

そこで従来に飽き足らない「図書館学」はないものかを考える。

1) 理念

その第一が図書館とは何だ？に答える学問ではなかろうか。今は図書館システムをどうするか、情報をどう処理するかに目が向いている。

2) 楽しい学問

そんな面白くない図書館学を面白く楽しい学問にしようとする。なにが学問を楽しむための条件とはなんだろうか。

同じ緯度の中には面白さも失われる、そこで他の学問のおもしろさをまねる、つまり考え方、研究方法を導入するのである。それが一般に受けることであり、馴染みやすいものへの要求となる。それは何よりも在野人に最も人気が高く受けている学問である歴史研究である。それは教科書のような歴史の流れを追う簡理論ではない、輪切り理論による歴史表現法が望ましい。その街の図書館の歴史と代表的な資料の紹介、図書館学である。その次が何と言っても文学研究であろう。文学に現れた「図書館」を探すのである。これは大変だ、小説をたくさん読まなければならない、気は遠くなるが楽しい学問である。

2. 図書館学方法論

そうした楽しい図書館学はどの様にして行ったらいいのだろうか。

1) 書齋科学

従来から図書館学の中心であった文献研究は今後も欠かせない。中でも既に述べた歴史研究であるが、司書科目にあるような図書館の建物の歴史ではない。歴史の中の図書館を探ることであり、時代背景と利用の実態を探れないか、人との関係、街との関係を文献に見る。文学研究も文献研究であり、既に述べた文学に現れた図書館を探ることで作家の図書館観を分析する。作家の育った環境、コンテクストの中から図書館の意味を見ることは出来ないか。

2) 野外科学（フィールドワーク）

これは文化人類学的手法といえる。実際に図書館を訪問する、現地研究（取材）であり、臨床図書館学（ベッドサイド図書館学）は対象を利用者と司書においてインタビュー（聞き取り調査）する。図書館の意味を探る。

3) 実験科学

コンピュータの応用であるが、個々では司書のためではなく、利用者が求めているものを考える。その一つがミーム（文化遺伝子）型データベースであり読者参加型データベースである。

3. 図書館人類学

図書館の文化人類学的研究、それが図書館人類学である。

1) 目的

人は何故図書館を作ったのかを考える、図書館における人間関係の変容の究明である。

2) 対象

現地調査が基本である。

－ 1 利用者

人は何故図書館を使うのか使わないのかを分析する、特に国によって文化によって異なる原因の解明である。利用者研究の見直しである。

－ 2 司書

歴史の変遷とともに役割の変化がある

－ 3 歴史の中の図書館

都市と図書館のつながりを研究する。図書館だけをたどる歴史ではない、歴史が図書館を創っていることを確認する。

－ 4 文学（小説）に現れた図書館

作家の図書館原体験を探る

この新しい手法は純粋科学の科学的手法を取らないから、普遍性、客観性、論理性を求めない。個々の研究対象がそれぞれ異なっていることを認識する。

4. 図書館人類学の方法（各論＝私の実践）

これは比較文化（現地調査）であり、私はイタリア図書館研究を選ぶ。文献研究では実物の図書館ガイドを読むことから始まる。そこに描かれている図書館の歴史から人と街との繋がりを考える。イタリアの文学と歴史に現れた図書館では、司書としてのジャコモ・カザノヴァがあり利用者としてのペトルルカからモラヴィアまで事欠かない。

5. 図書館サービス再考

1) 普段着の図書館学を

従来の図書館学の否定ではない、新しい「方法論」も導入して「図書館学」を見直すきっかけとなることを考えたい。誰も「着ている」図書館学でない、背広やスーツの図書館学でなく、Gパンの図書館学を目指してはいかがであろうか。

2) 司書の役割の再考

そのためにはまず司書がこれまでの「奉仕者」から「知の仕掛け人へ」と変わることが急務である。すると彼の仕事はサービスからサポートへと移行する。

日本の図書館学が英米の図書館用語を日本でも同じように安易に言葉だけ「サービス」に当てはめたのは明らかに「誤訳」である。Serviceイコール「サービス」ではない。むしろ日本の図書館サービスは「支援」とかこれも現在では全く日常語となっている「サポート」という言葉と置き換えるのが正確な表現であり真の意味の「翻訳」ではないかと思う。

こうして従来の「情報サービス」は「情報サポート」となり、同様に「レファレンス・サービス」が「レファレンス・サポート」となる。

3) 利用者を司書にする

これは利用者教育再考であり、情報検索の方法を教えるこれまでの見解を変えて図書館の理解を促進する、それは図書館ブラックボックスの開放である。

参考文献（私が愛する人々）

加藤秀俊さんは「整理学」（中公新書、1965）で利用者の立場から図書館は「利用者教育」をしなければと言いました。

山口昌男さんは「図書館人類学」の考え方を中村雄二郎さんとともに教えてくれました。

ウンベルト・エーコは小説「薔薇の名前」とミラノ市立図書館における講演集「de Bibliotheca」で、ホルヘ・ルイス・ボルヘスは「バベルの図書館」「砂の本」で、リチャード・ドーキンスは「利己的な遺伝子」でミームの存在を語り、知は全て繋がっているという考えを教えてくださいました、これらを「知のデータベース」として構築を図っています。

（しんじ つとむ 鳥取女子短期大学）